

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者樂地在者
 よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦主其臂力顯
 わして、しをもつてしをほろぼし、ふ復
 死以死滅
 くかつのはじめとなあり、われらをぢごく
 活首我等地獄
 のはらよりすくうい、せかいにおおいな
 腹救世界大
 るあわれみをたまいたればなり。

【 十字架叩拜のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主爾民救爾
 のぎょうにふくをくだせ、わがくにを
 業福降我國
 つかさどるものにてきにかたしめ、なんぢ
 司者敵勝爾
 のじゅうじかにてなんぢのすまいをまもり
 十字架爾住處守
 たまえ。

【 生神女福音祭のトロパリ 第4調 】

こんにちはわがすくいのはじいめ、えい
 今日我救初永
 きゅうのおうぎのあらわれなり、かみのこ
 久奥義顯現神子
 はどうていぢよのことなあり、ガヴリルは
 童貞女子爲
 おんちょうをふくいんす、ゆえにわれらもかれ
 恩寵福音故我等彼
 とともにしょうしんぢよによばん。おんちょうをこう
 偕生神女呼恩寵蒙
 むれるもの、よろこべよ、しゅはなんぢとと偕
 者慶主爾と偕
 もにす。

【 十字架叩拜主日のコンダク 第3調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにいき
 光榮父子と聖神にき歸
 す。
 ほのおのつるぎはすでにエデムのもんをまもら
 焰の劍既門守

ず、けだしこれをしりぞくるしえいなるじゅ
蓋之 卻 至 榮 十

うじかのきはいたれり、しのはりおよび
字架 木 至 死 刺 及

ぢごくのかちはほろびたり、けだしなん
地獄 勝 亡 蓋 爾

ぢは、わがきゆうせいしゅよ、あらわれて、
吾 救 世 主 現

ぢごくにあるものによべり、またらく
地獄 在 者 呼 復 樂

えんにいれ。
園 入

【 生神女福音祭のコンダク 第8調 】

いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世 世

しょうしんぢよよ、われらなんぢのぼくひはわ
生 神 女 我 等 爾 僕 婢 禍

ざわいよりたすけられしをもつて、なんぢよ
援 以 爾 克

くかつしょうすいにかちうたとかんしゃとをたてま
勝 将 帥 凱 歌 感 謝 奉

つる。かたれぬちからをたもつによ
勝 權 能 有 由

っ て 、 わ れ ら を も ろ も ろ の く な ん よ り す く
 我 等 諸 苦 難 救
 い 、 な ん ぢ を う と う て よ ば し め た ま え 、
 爾 歌 呼 給
 よ め な ら ぬ よ め よ 、 よ ろ こ べ 。
 聘 女 聘 女 慶

司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう}ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ}なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい}願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行^すう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
^{しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ}神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい}爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に^{われらこうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ よよ}獻ず、今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文に代えて 】

しゅ さ い よ 、 わ れ ら あ な ん ぢ の じゆう う じ か
 主 宰 我 等 爾 十 字 架

に 伏 ぐ は 拜 い し 、 な ん ぢ の せ い な る
 爾 聖

復 ぐ かつ を さん え い せ ん。しゅ さ い よ、
 活 讚 榮 主 宰

わ れ ら あ な ん ぢ の じゅ う じ か に 伏 ぐ は 拜 い
 我 等 爾 十 字 架

し、な ん ぢ の せ い な る 復 ぐ かつ を さん
 爾 聖

え い せ ん。しゅ さ い よ、わ れ ら あ
 榮 主 宰 我 等

な ん ぢ の じゅ う じ か に 伏 ぐ は 拜 い し、な
 爾 十 字 架

ん ぢ の せ い な る 復 ぐ かつ を さん え い せ ん。
 聖 活 讚 榮

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す、い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に、ア ミ ン。
 何 時 世 世

な ん ぢ の せ い な る 復 ぐ かつ を さん え い
 爾 聖

せ ん。

しゅさ い よ 、 わ れ ら あ な んぢのじゅ うじか
 主 宰 我 等 爾 十 字 架
 に ふ く は い し 、 な んぢの せ い な る
 伏 拜 爾 聖
 ふ く かつ を さん え い せ ん。
 復 活 讚 榮

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讚めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讚めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 福音祭の第4調 及び使徒の第6調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

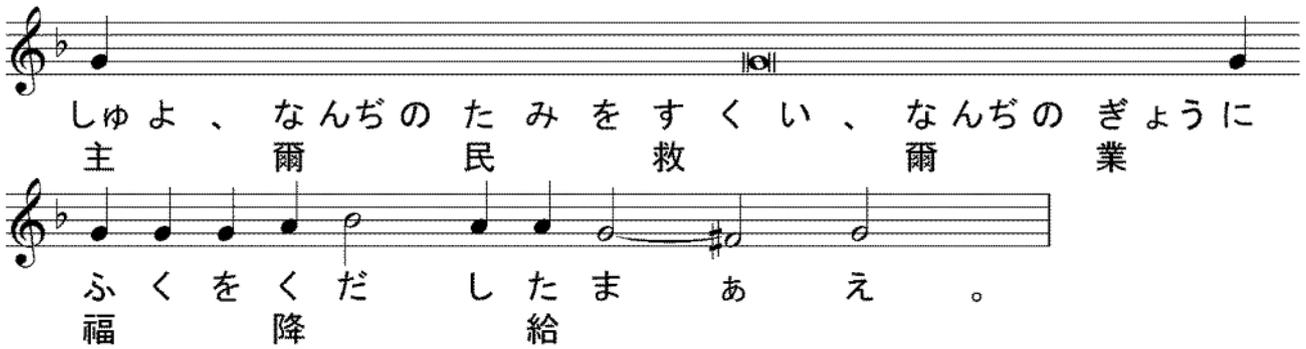
誦經) プロキメン、我が神の救を日に福音せよ、

わ が か み の す く い を ひ び に ふ く い ん
 我 神 救 日 日 に 福 音
 せ よ 。

誦經) 新なる歌を主に歌え、全地よ、主に歌え、

わ が か み の す く い を ひ び に ふ く い ん
 我 神 救 日 日 に 福 音
 せ よ 。

誦經) 主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、



【 アポστόロス 使徒經 エウレイ福音書 306 端 2 章 11~18 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、聖にする者と聖にせらるる者とは、皆一の者より出づ、是の故に彼等を兄弟と稱うるを愧ぢずして曰く、我爾の名を我が兄弟に傳え、爾を會中に詠わん。又曰く、我彼を頼まん。又曰く、視よ、我及び神が我に與えし諸子は此に在りと。夫れ諸子は肉と血とに屬するが故に、彼も亦親しく之を受けたり、死を以て、死の權を乗る者、即惡魔を空くし、死を畏るるに因りて生涯奴役に服せし者を釋たん爲なり。蓋彼は天使等より受くるに非ず、即アヴラアムの裔より受く。故に凡の事に於て兄弟に肖るべかりき、神の前に矜恤、忠信なる司祭長と爲りて、民の罪を贖わん爲なり。蓋彼親ら試みられて、難を受けしが故に、試みらるる者にも能く助くるを爲すなり。

(比較用 口語訳) 実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。すなわち、「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い、また、「わたしは、彼により頼む」、また、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子らとは」と言われた。このように、子たちは血と肉と共にあずかっているのだから、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち惡魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、アブラハムの子孫を助けられた。そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。

【 アポστόロス 使徒經 311 端 エウレイ書 4 章 14 節～5 章 6 節 】

誦經) 兄弟よ、我等に、大なる司祭長、諸天を経たる者、イイスス神の子有るに由りて、
我等の承認を固く守るべし。蓋我等の司祭長は我等の柔弱を體恤する能わ
ざる者に非ず、乃罪の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。故に
我等毅然として、恩寵の寶座に就くべし、矜恤を受け、機に合う助として、恩寵
を獲ん爲なり。蓋凡そ人の中より選ばるる司祭長は、人の爲に神に奉事することを
任ぜられて、禮物と祭祀とを罪の爲に獻ずる者にして、無智なる者及び迷う者を憐
むを能す、蓋自も亦柔弱に纏わる、故に彼は、民の爲にするが如く、己の爲
にも亦罪を贖う祭を獻ずべし。且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召
さるる者なり、アアロンの如く然り。是くの如くハリストスも、自ら司祭長の尊榮を以
て、己に歸せしに非ず、乃彼に、爾は我の子、我今日爾を生めりと、言いし者な
り、又他章に云えるが如し、爾メルキセデクの班に循いて司祭と爲り、世世に返らん
と。

(比較用 口語訳) わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいま
すのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの
弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、
わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵
みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。
大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、
人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な
迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身
のためにも、罪についてささげものをしなければならぬのである。かつ、だれもこの榮譽ある務を自
分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストも
また、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを
生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でこう言われている、「あな
たこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

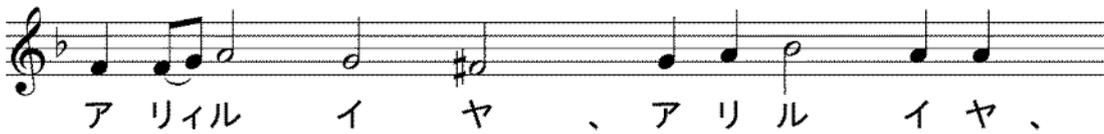
【 アリルイヤ 福音祭の第4調 及び十字架叩拜の主日の第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

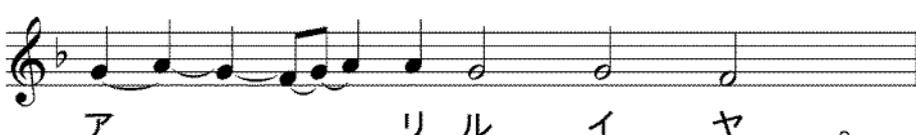
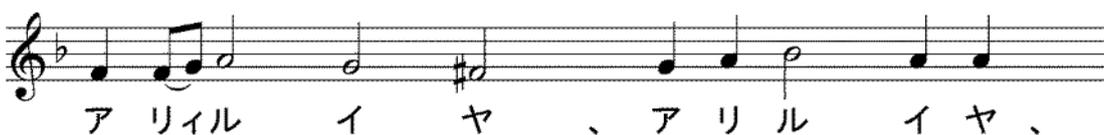
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

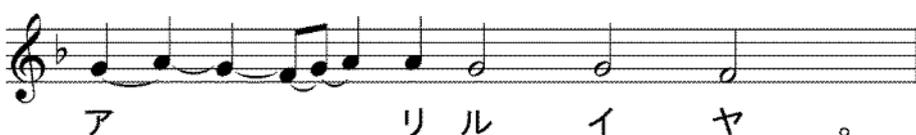
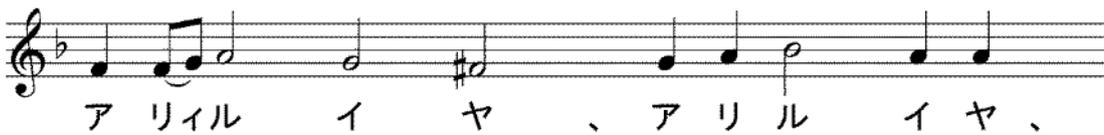
誦經) ^{かれ か くさば くだ あめ ごと つち うるお したたり ごと くだ} アリルイヤ、彼は^{かれ} 苳^かりたる^{くさば} 草場^{くだ}に降^{あめ}る雨^{ごと}の如^{ごと}く、土^{つち}を潤^{うるお}す雨^{したたり}滴^{ごと}の如^{ごと}く降^{くだ}らん、



誦經) ^{かれ な あが ほ よよ いた ひ あ あいだ くれ なつた} 彼の^{かれ} 名^なは崇^{あが}め讃^ほめられて^{よよ} 世^{いた}に至^ひらん、日^あの在^ある間^{あいだ}は彼の^{くれ} 名^な傳^{なつた}わらん、



誦經) ^{なんぢ いにしえ え なんぢ かい きおく} 爾^{なんぢ}が古^{いにしえ}より獲^えたる^{なんぢ} 爾^{かい}の會^{きおく}を記憶^{きおく}せよ



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅさい} 宰^わよ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知る^し 智慧^{ちえ}の 浄^{いさぎよ} き光^{ひかり}を輝^{かがや}かし、我^わが思^{しねん}念^ん

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目^めを啓^{ひら}きて、爾^{なんぢ}が福^{ふくいん}音^{おしえ}の 教^{さと}を悟^{たま}らしめ給^わえ、我^わが衷^{うち}に爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる 誠^{いましめ} を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏^{おそ}る 畏^{おそれ} をも入^いれて、我^{われら}等^{ことごと}が 悉^{にくたい} くの肉^{よく} 體^ふの慾^{およ}を踏^{なんぢ}み、凡^{よるこ}そ爾^{ところ}の喜^{よるこ}ぶ 所^{ところ}

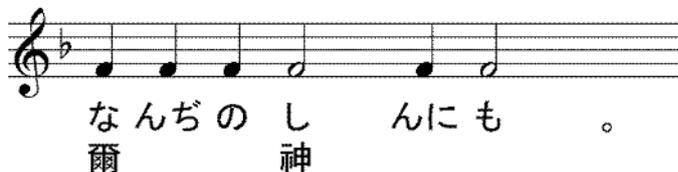
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし しみ} を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、屬^{ぞくしん} 神^{せいかつ}の生^す 活^{いた}を過^{たま}ぐるを致^{けだし}させ給^{しみ}え、蓋^{たまたま} ハリス^{けだし}トス神^{かみ}よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾^{なんぢ}は我^わが 靈^{たましい} と 體^{からだ} との光^{こうしょう} 照^{われらなんぢ}なり、我^{なんぢ}等^{なんぢ} 爾^{むげん} と 爾^{ちち}の無^{しせいしぜん} 原^{しせいしぜん}の父^{しせいしぜん}と至^{しせいしぜん} 聖^{しせいしぜん} 至^{しせいしぜん} 善^{しせいしぜん} にし

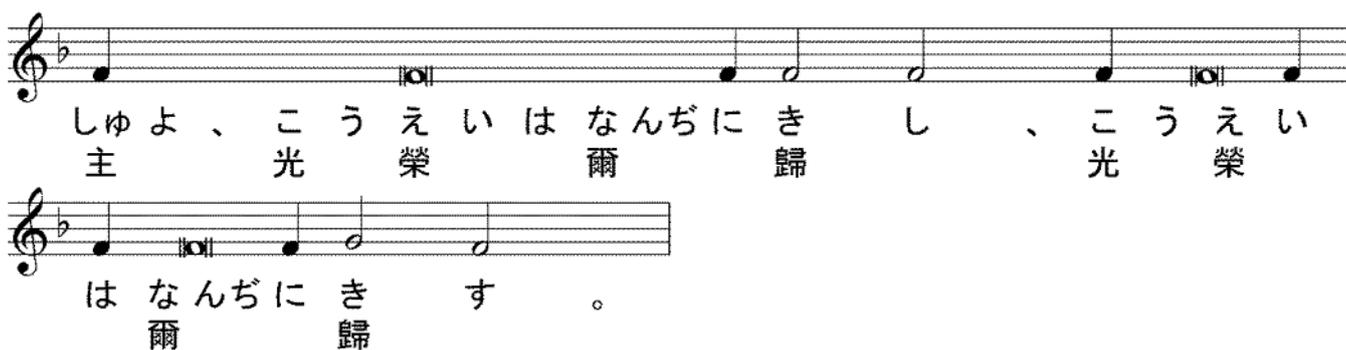
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書3端 1章24~38節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の日ザハリヤの妻エリサヴェタ妊みて、隠れ居りしこと五月にして曰

えり、主は斯く我に爲せり、彼は此の日に於て我を眷みて、我が耻を人人の間に洒が

しめたり。第六月に於て、天使ガヴリイルは神より使を奉じて、ガリレヤの邑ナザレト

と名づくる所に、ダヴィドの家の人、名はイオシフと云う者に聘せられたる處女に臨めり、

處女の名はマリヤなり。天使入りて、之に謂えり、恩寵を蒙れる者、慶べよ、主は爾

と偕にす、爾は女の中に祝福せられたり。女彼を見て、其言を訝り、此の問安

は何事ならんと思えり。天使之に謂えり、マリヤ懼る勿れ、蓋爾は神の前に恩寵

を獲たり。視よ、爾妊みて子を生まん、其名をイイスと名づけん。彼は大なる者となり

て、至上者の子と称えられん、主神は彼に其祖ダヴィドの位を與えん、彼は世世イ

ァコフの家に王となりて、其國終なからん。マリヤ天使に謂えり、我人に適かざるに、如何

にして此の事あらん。天使彼に答えて曰えり、聖神爾に臨み、至上者の能爾を蔭

わん、故に生む所の聖なる者も神の子と称えられん。視よ、爾の親戚エリサヴェタ年

老いて子を妊めり、素妊まざる者と称せられしに、今已に六月なり。蓋神に在りて

およ そのい ところあた い われ しゅ ひ なんぢ ことば ごと われ
は凡そ其言う所 能わざることなし。マリヤ曰えり、我は主の婢なり、爾の言の如く我
な てんしかれ はな
に成るべし。天使彼を離れたり。

(比較用 口語訳) そののち、妻エリサベツはみごもり、五か月のあいだ引きこもっていたが、「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしていただきました」と言った。六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなづけになっていて、名をマリヤといった。御使がマリヤのところにきて言った、「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。この言葉にマリヤはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思いめぐらしていた。すると御使が言った、「恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」。そこでマリヤは御使に言った、「どうして、そんな事があり得ましようか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。あなたの親族エリサベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六か月になっています。神には、なんでもできないことはありません」。そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。そして御使は彼女から離れて行った。

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書 37 端 8 章 34~9 章 1 節 】

しゅい われ したが ほつ もの おのれ す そのじゅうじか お われ したが けだし
司祭) 主謂えり、我に 従 わんと欲する者は、己 を捨て、其 十字架を負いて我に 従 え。蓋

おのれ いのち すく ほつ もの これ うしな われおよ ふくいん ため おのれ いのち うしな
己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の爲に己の生命を喪

もの これ すく けだしひと も ぜんせかい う おのれ たましい そこな なん えき
わん者は、之を救わん。蓋 人若し全世界を獲とも、己の靈を損わば、何の益か

そもそもひとなに あた そのたましい つくのい な けだしこ かんあく よ おい われ
あらん。抑 人何を与えて、其 靈の償と爲さんや。蓋 此の姦惡の世に於て、我

およ われ ことば は もの ひと こ そのちち こうえい もつ せい てんしら とも きた
及び我の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖なる天使等と偕に來らん

ときかれ は またかれら い われまこと なんちら つ ここ た もの うち いま し
時彼を耻ぢん。又 彼等に謂えり、我 誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死

な かみ くに ちから もつ きた み もの
を嘗めずして、神の國が權能を以て來るを見んとする者あり。

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子も

また、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖體禮儀③（金口イオアン）へ